

波の音で目覚めた。眼前には青い海と白い砂浜が広がり、鳥の羽ばたきも聞こえてくる。

そして……ジリジリと容赦なく照りつける太陽。

「あっっ、暑っっ～い～！」

サンダルで砂を踏んでいるだけなのに、ジリジリしてくる。

今すぐ木陰に行って、冷たい水でいいから口に含みたい。どうやっても手に入りそうにないけど。

着ているワンピースにはいくつものかぎ裂きができ、水が垂れるくらい濡れている。

（私のほかに誰もいないみたい……ここは無人島？何か食べられるもの探さなきゃ）

よろよろと歩き始めた。浜辺を離れて、木々の生い茂るジャングルみたいなななかを歩いてゆく。

（食べられそうなもの……ない。それに湧き水も。あ、でも見つけても菌がいたらお腹をこわすから飲まないほうがいいんだっけ）

ヤシみたいな背の高い木を見上げると、丸い実が見えた。

「あ、これってココナツ？！」

よくよく辺りをみると落ちて実がある。拾い上げて土を払う。振ってみると、チャポチャポと水の音がする。

「…道具がないとだめだね。穴をあけるか、割るか」

数時間かけて彷徨っていると、少し遠くの高台に白い煙を見つけた。けれど、急にめまいがしてきて、その場にへたり込んでしまった。

気づけばもう太陽が落ちようとしている。絶えず獣の気配がしていてすごく怖い。しかも肌寒い。何とか立ち上がり、のろのろと進んでいると…。

「わっっ」

ビュンツ！！石つぶてのようなものが勢いよく飛んできた。
何かに当たったのか、ギャツと鳥みたいな鳴き声がある。

飛んできた方向を確認しようとしたら、誰かに腕をつかまれた。

「き、きゃああ！！離してえッ」

かすれた声で叫ぶけど、その男の人は無言のまま。もがいてみても全然ビクともしない。片方の手には今しがた獲れた野鳥を鷲づかみにしている。

（ちょっと～～！！私どうなっちゃうの？ま、まさか食べられちゃう…！？）

そのまま、どこかへ引っ張って連れていかれた。

パチパチと炎が揺らめく。

連れてこられた先は小さいながらにちゃんと住居みたいだった。

うす明かりで見ると、意外にイケメンな人だった。それも若い。

（私より年下かも？）

植物の葉で作られた腰みのをつけていて、上半身は裸。

目がとても綺麗で、肌は日焼けして褐色。鍛えているのか腕や肩にも適度な筋肉がついている。

チラチラと逃げる隙を伺う希海の前にぐいっと差し出されたのは、串に刺さった何かの肉とココナツだった。ちゃんと割ってある。

「…こ、こここれ、食べても、いいんですか？」

噛みまくりながら言い、ごくりとツバを飲む。

青年が小さく頷いた。

（言葉、通じてる？）

それよりいまはカラカラの喉やお腹を満たすのが先決だった。

肉は硬くて味付けがなく、ぬるいココナツウォーターも少し飲みにくい。でも、だいぶホッとした。

希海が食べるところを、青年は少し離れたところに立ち、食い入るように見ていた。

彼のおかげで人心地がついた希海は、ここへ来るまでのことを思い出した。

英語の習得を目的にしたワーキングホリデーのために生まれ育った国を離れ、現地のレストランスタッフとして暮らし始めてまだ4カ月くらい…だったはず。

同じシェアハウスの女友達に誘われ、お洒落させられてたしか…お金持ちが所有するクルーズ船に乗ったのが最後の記憶だ。

友達は社交上手でいい子なんだけど、おしが強くてクルーズ船の誘いも断れなかった。

（嵐の多いところだから、巻き込まれたのかも。一緒だった人たちは無事かな？）

考えるほどに不安で心配になる。

火のそばで濡れた服を乾かしていると、ロイが手招きしてきて寢床へ案内してくれた。

木の上の小さなスペースで、乾いた干し草が敷きつめられている。

炎天下を歩き回った疲れがどっとでてきたのを感じた。

意外にも悪くない寝心地で、すぐ眠りにおちた。

翌朝、早く目が覚めてしまった希海は、あらためて拠点を見て驚いた。

樹上ハウスには植物のつるを上手に使い、枝やヤシの葉を編んだもので床やドアを作られ、太めの木の幹で支えられている。

煮炊きできるスペースはやや離れたところにあり、石と粘土で作られたかまどもある。

「えっ…これ作ったのロイさんだよね！？すごい…」

手作りの感じはあるけど、しっかりしたつくりに感心した。

気づくと側にロイがいて、またまた照れた顔をしている。

あと、ちょっと眠たそう。新参者の私を警戒したのか、寝床を譲ったせいかもしれない。

「あっ、ロイさん。おはようございます」

ニコツと笑いかけると、ぎこちないおはよ、が返ってきた。

「あの、道具を借りてもいいですか？朝食を作らせてください」

ロイが、え？みたいな顔をしたけどどうなづいたのを確認する。

私は手早く料理した。といっても食材や、調理法は限られている。
でも、そんな限られた条件のほうがかえって作り甲斐があった。

私は高校の頃からレシピサイトやSNSにレシピを投稿するほどの料理好きだ。レストランでもキッチンで働いていて、新入りなのにすでにまかないを任され、かなりの好評を受けているくらいだ。

半分にカットした焼きバナナにココナツを少し削ったものと、鳥(たぶん)肉の蒸し焼き。ヤシの葉で包んだから、そのまま開いて器がわりにもなる。それに、レモングラスのお茶。レモングラスはたまたま見つけて取ってきた。

細い葉の香りをかいだときは飛びあがるくらい感動した。束ねて少し叩いて香りを出し、土器で煮出している。

ロイさんは出来上がった食事を前に、目を大きく開いて固まっていた。

「あの、お口に合うといいんですけど…」

一瞬ちょっと不安になったけど、ひと口食べてからはすごく美味しそうに食べていたし、あっという間に完食だった。

「…うまかった。ノゾミ、料理うまいな。また、作る？」

ちょっと子どもみたいな目をして言われて、もちろん喜んでと答えた。



「……行くぞ！」

「！う、うん」

差し出された手を、私は震えの止まらない手でつかむ。助かった。早足でロイさんとその場を去った。

横目でちらっとみると、ロイさんも私を見ってくる。

「ケガは？何かされたか」

「ううん、大丈夫……ありがと」

拠点に戻るなり、私はロイさんに抱きすくめられた。顔が近づいてきて、キスもされた。

「んん？！ロ、ロイさんッ…」

ロイさんは無言のまま、私の腰に手を回してくる。やめてほしくて訴えてみるけど、まるで聞こえないみたいだった。

キスが、思いがけず甘くて優しい。

私の昂ぶった気持ちが少しずつおさまっていく。

ロイさんは興奮しているのか息を荒らげながら、私のことをぎゅうっと抱きしめてくる。

見た目より遥かに逞しい腕や、筋肉質な盛り上がった胸板に身体が押し当てられて、ドキドキが止まらない。

辺りはもう薄暗くなっている。

(ロイさん何考えてるの？顔が見えづらくてわからない)

下半身をさあっと風がなでるので気づいた。付けていたはずの腰みのが、あっさり取り去られている。

「ひゃああ！！」

思わずヘンな声がでて、ロイさんがふっと笑った気がした。

「だいじょうぶだよ、優しくする」

「や、やさしくって、何…」

「ん～、こういうこと？」

回された大きな温かい手が私の片足を持ち上げ、太ももをなでていく。

「ノゾミの肌、すべすべしててすごく気持ちいいね。ずっと触りたかった…♡」

「……っ！！」

「それに、胸も。すごく綺麗だし、柔らかそうで」

足のほうに集中していたら、胸を隠していた衣服代わりの葉もはぎ取られている。しかも、ロイがはむはむと熱っぽい唇をおしあて、揉むみたいな動きをしてみた。

(こ、これだめえっ、食べられてるみたい…)

「ほんとすごく綺麗、白いよね。それにふわふわしてる♡」

熱い吐息が柔肌にあたるたび、身体の奥がゾクゾクする。

ノゾミが過去に経験した数えるほどの男の子との経験を思い出してみても、ロイみたいに巧みな愛し方をされたことはなかった。

第一印象は先住民族に間違えたくらいで、ロイがこういう色っぽいことを得意だなんて思いもしてなかった。

触れられたところがとろけそうになって、私はだんだん喘ぎ声を抑えられなくなっていった。ロイの耳にもそれはしっかり届いているみたいで…。

急に抱え上げられ、私が驚いているとやがてそっと降ろされた。

「あ……！」

この数週間、2人で作り上げてきた真新しい住居だった。寝心地はちょっと硬いけど、敷かれている干し草の香りがいい。

ロイはさっと外へ出ていき、すぐにココナツオイルのランプを手にして戻った。ほのかに明るくなって、ホッとする。

「ノゾミ、やっぱり、イヤ？」

こちらへ向き直ったロイに、眉のさがった顔をしながら熱っぽい声で言われて胸がドキッとした。

でも、またキスされたからか何も考えられなくなる。ロイはほんとうにキスも上手かった。不思議なくらいに。

夢中になっていたら、ロイの手が私の足をそっと開かせ、もう何も覆っていない秘処を優しく撫でている。

「あ、んっっ…♡」

クチュ、と湿り気のある水音がして、濡れているんだとわかった。

蜜をすくったロイの指が簡単にクリトリスを捉え、撫ぜて刺激してくる。触れるか触れないかくらいの感じがかえって気持ちいい。

島に来てからはとくに、自分でもほとんど触っていなかったそこには充分すぎる快感。それを、カラダが全て拾い上げていた。

（やだあっ、、イヤなはずなのに、身体が…♡！）

ロイは私の反応に気をよくしたのか、指をとめないままに胸や乳首もレロ、レロンと舌で舐めてくる。

「あ〜っ♡一緒にするの、だめ…！」

「だめ？……あー、もう。ノゾミ、可愛いすぎ」

足にぎゅうっとチカラが入って、余計に感じてしまう。

お尻の下の干し草に蜜が垂れるくらいになったとき、今度はロイがナカに指を差し込んできた。

グプツ、ヌチュ♡♡すごく太く長いと感じる指を、いとも簡単に飲み込む。

「ん♡そこ、だめえ……ツ♡！」

「ノゾミのココ、熱くなってるよ」

Gスポットをとんとんと突いてみたり、ちょっと押し込むようにされる。受けたことがない刺激を逃そうと、私は懸命に腰を浮かせていた。

さらに、尖らせた舌先でクリトリスを軽く弾くように舐められると、強烈な快感がこみあげた。さっきまで指先で触られていたのが焦らしになっていて、余計に感じてしまう。

今度は2本に増やされた指を、ずぶん♡♡と奥まで入れられる。

くるくると優しくかき回され、奥を押し広げるような動きもされた。

グチュッ、グチュッという音が、私がすごく感じていることを証明してるみたいだった。

「それ、おかしくなっちゃ♡♡……んんう！」

浅くイクのを3度は繰り返してしまっている。